

『あわれみとさばき』 ヤコブの手紙 2 章 8～13 節

1. 最高の律法

前回のところで人を「えこひいき」することは神の「**律法**」にかなっていないということでしたが、8～9 節に「**もし本当に、あなたがたが聖書にしたがって、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行いは立派です。しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。**」とあります。どういうことでしょうか。

ヤコブはここで、旧約聖書の中から一つの神の「**律法**」を引用して、さらに話を勧めています。その「**律法**」とは、「**あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい**」ということです。イエス様はこれを「**最高の律法**」と言われました。なぜなら、「**律法**」のすべては、「**あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。**」という戒めと、「**あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。**」という戒めの二つの戒めに要約することができるからです。神を愛することと、隣人を愛するという二つのことが、「**律法**」の中心なのです。これが「**最高の律法**」です。それなのに、もし人を「えこひいき」するということがあれば、この「**律法**」に違反することになります。そうであれば、罪を犯していることになり、「**律法**」の違反者として責められることになるのです。なぜなら、「**律法**」全体を守っても、一つの点でつまずくなら、すべての戒めを破ったことになるからです。

10～11 節には、「**律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。「姦淫してはならない」と言われた方は、「殺してはならない」とも言われました。ですから、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者になっているのです。**」とあります。私たちは、どちらかというと、不品行とか殺人、嘘、不正といった罪は大きな罪のように感じますが、人を「えこひいき」することはそんなに悪いことではないかのように思っています。しかし、神の目ではどれも同じ罪であり、特に、この人をえこひいきすることは「**律法**」の中でも「**最高の律法**」に違反することなので、当然、罪に定められることになるのです。

イエス様の山上の説教における「**律法**」の厳しい解釈は、ヤコブの手紙にとっても近い考え方であると言えます。マタイの福音書 5 章 27～32 節に『**姦淫してはならない**』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。また『**妻を離縁する者は離縁状を与えよ**』と言われていました。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁する者は、妻に姦淫を犯させることになります。また、離縁された女と結婚すれば、姦淫を犯すことになるのです。』と言われました。

「**律法**」の全てを遵守することが不可欠であるという考え方は、申命記 27 章 26 節にも『**このみおしえのことばを守ろうとせず、これを実行しない者はのろわれる。民はみな、アーメンと言いなさい。**』とあります。神の啓示はその全体が一つのまとまりをなしています。シナイ山で神はイスラエルの民に御自分を啓示なさいました。その時に神は、イスラエルの民に何かしらの彫像を彼らが神としてあがめるためにお与えにはなりません。その代わりに神が彼らに遵守すべきものとして賜ったのが「**律法**」だったのです。その意味で「**律法**」には神の御心が具体的に表現されていると言えます。

2. 自由をもたらす律法

12 節に「**自由をもたらす律法によってさばかれることになる者として、ふさわしく語り、ふさわしく行いなさい。**」とあります。この「**自由をもたらす律法**」とは、どういうものでしょうか。そもそも「**自由**」と「**律法**」とは、互いに相容れないものなのではないでしょうか。実際の日常生活にあてはめてこの問題を考えると、「**律法**」が私たちの自由を制限するものとして働いていることがわかります。そもそも本当の意味で「**自由**」な人間など存在するの

でしょうか。人が「自由」であるために満たすべき基本的な条件は、自分がいったい誰であり何者であるかを正確に把握しているということです。しかし、自分が何者かを知らない人は、真の意味で自己を実現することができません。結局のところ、己の何たるかを知らない人は金銭や権力やその他諸々の事柄によって支配されるようになるのです。

では、人間とはいったいどのような存在なのでしょう。創世記 1 章 27 節に「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」とあるように、人間は「神の似姿」であると聖書は答えています。このように人間が「神のかたち」であるように、「律法」を含めた神の全啓示もまた神についての「かたち」の表れであると言えます。元々は人間と神の啓示とは調和していて互いに矛盾するものではなかったのです。それゆえにこそ、本来ならば「律法」は「自由をもたらす律法」でもありえるものなのです。最初の人間たちが罪に墮落する前には、人間と神の啓示は調和していました。ところが、彼らが罪に墮落してしまった結果、人間のうちにある「神のかたち」が損なわれ、彼らの子孫である全人類は神の御心に反抗するようになりました。それとともに、「律法」は人間生活における憎らしい敵になってしまったのです。しかし、元々はそうではありませんでした。神が私たちのうちで御業を行われている時には、「律法」の善い面が私たちに明らかにされて「律法」に従うことも嫌なことではなくなります。私たちが「律法」を神からの素晴らしい賜物とみなすようになるからです。様々な被造物や事柄に対して奴隷のように振り回されないかぎり、人は「自由」な存在でありえます。真なる「自由」は、神の意思の内のみ見出されます。人は神の意思の内においてこそ自分に本当にふさわしい場所を見つけることができるからです。

3. あわれみ

13 節に「あわれみを示したことがない者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」とあります。どういうことでしょうか。貧しい人をさばいて、軽蔑するような態度は、後に、同じように「あわれみ」がない「さばき」によって、さばかれるようになるということです。イエス様は、「さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。」(マタイ 7:1) と言われました。「あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。」(マタイ 7:2) それと同じように、もし私たちが人を「あわれむ」なら、やがて「あわれみ」を受けることになります。しかし、これほどの「あわれみ」を受けていながら「あわれみ」を示すことがなければ、その人に対する「さばき」は、「あわれみ」のない「さばき」となって自分に返ってくるのです。

私たちの内の誰一人として全ての「律法」の要求を完全に満たすことはできません。それゆえ、私たちが「律法」を通して救われようとする試みはうまくいかないのです。私たちに残されているのは恵みの道だけです。しかし、もしも私たちが本当に恵みの道を歩んでいるのなら、私たちは互いに対して「あわれみ深い態度を示すようになるはず」です。このことについては、「あわれみに欠けたしもべについてのイエス様のたとえと比較してみてください。また、イエス様は山上の垂訓においても「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。」(マタイ 5:7) と教えておられます。ところが、もしも互いに対して「あわれみ」に欠けた態度を取るのなら、神が私たちに「あわれみ」深く接してくださることを期待することはできません。

4. あわれみとさばき

13 節の言葉は、一見自分の行動がそのまま自分に返って来るというように聞こえる言葉なので、どうしても私たちには、「さばき」という言葉ばかりが気にかかりますが、この文章の主要な言葉は「あわれみ」の方なのです。もちろん「情け」を軽んじる人は、自らも「情け」とは無縁の生き方になります。ところが「あわれみ」とは、人間関係を表す言葉というよりは、神の本質を表す用語なのです。神は、「さばく」から神なのではなく、「あわれむ」からこそ、神なのです。

旧約で最も何度も繰り返される言葉こそ「あわれみ」です。原語は、「哀れみ、慈しみ、悲しみ、共感」そして「愛」

全体を表す言葉です。「あわれみ」において、神は私たちと共にいてくださるのです。だから「あわれみ」を捨てたり、無視したりする者は、知らず知らずに、神を自分の生きている場所から追い出してしまうのです。教会に、「あわれみ」がなくなってしまったなら、そこには人間の「さばき」だけが残るのです。

イエス様は、十字架の上で叫ばれ、息を引き取られたという「わが神わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」神の「さばき」の行きつくところが、この御言葉に全て表されています。神はその「さばき」において、御子すらお見捨てになるのです。そして御子に「さばき」の刃を向けることで、私たちに「あわれみ」を残してくださった。その十字架で現わされた「あわれみ」から自分を切り離したら、私たちはどこに行けばよいのだろうか。あなたの信仰に、愛は息づいていますか。愛が死んでいませんか、私たちにとって、13 節の「あわれみを示したことがない者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」という言葉は重い問いかけです。

詩篇 103 篇 8～14 節に「【主】はあわれみ深く情け深い。怒るのに遅く恵み豊かである。主はいつまでも争ってはおられない。とこしえに怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず私たちの咎にしたがって私たちに報いをされることもない。天が地上はるかに高いように御恵みは主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように主は私たちの背きの罪を私たちから遠く離される。父がその子をあわれむように【主】はご自分を恐れる者をあわれまれる。」とあります。神がどのような方であるかというイメージが、人の生き方を大きく左右します。もし、神が、いつも怒っていて、天罰をくだす存在だとすると、私たちは平安を持って生きていくことはできません。この詩篇はダビデによって書かれたものです。ダビデは神を心から愛した人物でありながら、大きな罪を犯してしまった人物でもあります。ダビデは、神は正義であると同時に、「あわれみ」と愛に満ちた方であることを証言しています。「神の正義」の基準は「完璧」です。つまり、99 の良い行いをして 1 つの罪があるならば、それは義とは認められないということです。そして、罪に対する「さばき」があることも聖書は教えています。残念ながら、この完璧が求められる「神の義」の基準に到達できる人間はひとりもいません。

同時に神は「あわれみ」に満ちた、愛の方でもあります。「ご自分を恐れる者をあわれまれる」とダビデは歌っています。人が義と認められる方法は、旧約聖書の時代、イエス様の時代、そして現代まで一貫しています。それは、神を信じ、従おうとする「信仰」と神の「あわれみ」による「罪の赦し」です。この詩篇からは、罪の赦しはダビデの個人的な体験であると同時に、人類全体、そして人類の歴史全体に関わった壮大な神の働きだということが見えてきます。

詩篇 103 篇 17 節に「しかし【主】の恵みはとこしえからとこしえまで主を恐れる者の上にあり主の義はその子らの子たちに及ぶ。」とあり、同じ 22 節に「【主】をほめたたえよすべて造られたものたちよ。主が治められるすべてのところで。わがたましいよ【主】をほめたたえよ。」とあります。私たち一人一人もこの壮大な計画の中に含まれているのです。全ての人がキリストの十字架の赦しによって義と認められます。ダビデは 7 節で「主はご自分の道をモーセにそのみわざをイスラエルの子らに知らされた方。」と言っています。つまり、私たちは自分勝手な方法で「信仰」するのではなく、神ご自身が啓示された「道」を歩まなくてはなりません。旧約聖書の中には、キリストに関する多くの預言がありますが、ダビデ自身もメシアが自分の家系から出るという約束をいただいていた。モーセを始め、その後の預言者たちが残した預言の成就がイエス・キリストなのです。イエス様は自分のことを指して「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」(ヨハネ 14:6) と宣言されました。それまでのイスラエルと神との歩みがイエス・キリストという一点に集約されたのです。

詩篇が語っているこの神のいつくしみ、「あわれみ」が、神のひとり子主イエス・キリストによって私たちにも与えられています。イエス様は、神の恵みによって生かされながら神に従わず、神を無視して自分勝手に生きている私たちの罪を背負って十字架にかかって死んで下さいました。イエス様が、私たちの身代わりになって、罪人に対する神の怒りと裁きを引き受けて下さったのです。そのイエス様の十字架の死によって、神は私たちと新しい契約を結んで下さいました。私たちの罪を赦し、神の民として下さったのです。それは神の深い「あわれみ」によることです。

神は罪人である私たちに、ひとり子イエス・キリストによってこの「あわれみ」を既に与えて下さっているのです。私たちは、イエス様が求めておられる「あわれみ深い者」からはほど遠い者ですが、その私たちに、イエス様によって、「その人たちはあわれみを受ける」という幸いが既に与えられているのです。

したがって「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。」（マタイ 5:7）の教えは、「あわれみ深い者になりなさい、そうすればあなたがたは神のあわれみを受けて幸いになることができます」ということではありません。私たちが「あわれみ深い者」になったら「あわれみ」を受けることができるのではなく、私たちは神の「あわれみ」を既にいただいているのです。それゆえに、「あわれみ深い者」となることができるのです。神は、ひとり子イエス・キリストによって、その十字架の苦しみと死によって、私たちを「あわれみ」、罪を赦して下さいました。私たちの罪は、神のひとり子が十字架にかかって死ななければならない程大きいのです。私たちはどんなに努力しても、一生かかっても、それを償うことはできません。償うどころか、私たちは日々、その罪を増し加えているのです。その私たちの罪を、神は全て帳消しにして下さいました。借金を帳消しにしたら、貸していた者は損害を受けるのです。神は私たちの罪を赦すために、莫大な損害を引き受けて下さいました。それがひとり子主イエス・キリストの十字架の死です。神はその損害、苦しみを引き受けて、私たちを赦して下さいました。そこに、神の深い「あわれみ」があります。

マタイの福音書 18 章 21～35 節に「仲間を赦さない家来のたとえ」があります。ある王が、自分に一万タラントの借金のある家来を、憐れに思って赦してやった。借金を帳消しにしてやったのです。一万タラントというのは天文学的数字で、一生かかっても絶対に返すことのできない額です。それほどの借金を赦してもらったその家来が、その直後、自分に百デナリの借金のある仲間と出会います。百デナリは百日分の賃金ですから、決してはした金ではありません。しかし彼が赦してもらった一万タラントとは比べものになりません。しかし彼はその仲間を赦さず、あくまでも借金を取り立てようとした。それを聞いた王は怒って、彼の借金帳消しを取消したのです。王は彼に「悪い家来だ。おまえが私に懇願したから、私はおまえの負債をすべて免除してやったのだ。私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。（32～33 節）」と言っています。これが、私たち一人一人に神が語りかけておられる御言葉です。その「あわれみ」によって私たちを赦して下さいました主が、私たちに、自分に百デナリの借金のある人を赦すことを求めておられるのです。それが、私たちが「あわれみ深い者」となることです。百デナリの借金を赦すのは、決して簡単ではありません。相当の損害を引き受けなければなりません。人を赦すこと、「あわれみ深い者」となることは、それを本当に実行しようとするなら、苦しみを負わなければならないのです。損をしなければならないのです。「これはひいては自分のためにもなる」などと思っているうちは、本当に「あわれみ深い者」になることはできないのです。どう巡り巡っても自分のためにはならない、むしろ苦しみや損失を受けるだけ、という場面において、私たちの「あわれみ」深さが問われるのです。そこでなお「あわれみ深い者」となることは、私たちの努力によってできることではありません。私たちが主イエスによって神の大きな「あわれみ」をいただいていることを知り、その「あわれみ」に応えて生きようとする時に、イエス様が私たちの中に、そのような「あわれみ深い」思いを造り出して下さるのです。

「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。」、この教えは、イエス様における神の深い「あわれみ」の中で私たちに語られています。罪に満ちている私たちは、その「あわれみ」にすがることによってしか生きることにはできないのです。そして神は、本当に有り難いことに、ひとり子イエス・キリストの十字架の苦しみと死、そして復活によって、罪と汚れに満ちた私たちを赦し、私たちを神の契約の民として新しく生かして下さいました。「その人たちはあわれみを受ける」という幸いを、既に与えられているのです。それゆえに私たちは、「あわれみ深い者」となろうとするのです。そのことを生涯の課題として生きていくのです。

現代を生きる私たちもまた「信仰」によって、神の「あわれみ」と愛のゆえに神に受け入れられることができます。神の「あわれみ」と愛に目を留めていきましょう。